

「見えない」ことと「見ない」こと

福田 善乙（高知短期大学名誉教授）

2019年度の総会・シンポジウムのテーマは「“見えない”格差・困窮・貧困と日本経済を考える」というものであった。

「情勢が劇的に進み、『見たいもの』ばかり見て、『自分とは別の暮らし』が見えなくなっている」として、生協が「見えにくくなった暮らしにも目を向けて、それを真剣に考える必要があるのではないか」と問題提起をしている。

この「見えない」現実を「見える」ようにして、現場に依拠しながら考えようとするものであり、私は大切な視点であると思う。

しかし、この「見えない」ないし「見えにくく」なっている現実を「見える」ようにすると同時に、あえて「見ない」「見たくない」という状況が広がっていることに注目する必要があるのではないか。

すなわち、グローバル段階での経済的効率第一主義・成果至上主義と生き残りをかけた「生存競争」の強制とアベノミクス流の上意下達方式の一般化の中で、国民は人と人との間の関係がズタズタに引き裂かれて、疲労感のなかで、「絶望」と「不信」と「あきらめ」が覆い尽くす状態になっているように思われる。

この打開の道を示していくことが求められている。

すなわち、「絶望」のそばに「希望」が、「不信」のそばに「信頼」が、「あきらめ」のそばに「光」が寄り添っていることを、現実から現場から示していくことが大切になっているのではないか。

そこに、「生協」などの役割が大きくなっているのではないか。

その場合、「共」・「協」・「響」がキーワードになると思っている。

それは、ごく当たり前に「生きている」こと自体が、ともに生きる「共生」、力を合わせて生きる「協生」、心の琴線に触れながら生きる「響生」であるからである。

勝つか負けるかの生き残りを強制される「生存競争」の「競争」も、ともにつくる「共創」、力を合わせてつくる「協創」、心の琴線に触れながらつくる「響創」へ転化させていくことが可能だからである。

「教育」の内容や意義も、ともに育つ「共育」、力を合わせて育つ「協育」、心の琴線に触れあいながら育つ「響育」になるからである。

それゆえ、現実から現場からの視点で、「絶望」ではなくて「希望」を、「不信」ではなくて「信頼」を、「あきらめ」ではなくて「光」を提示し、それに気づき、その「希望」「信頼」「光」の芽を育て、大きくしていく道すじを明らかにすることが大切ではないか。

そのなかで、あえて「見ない」「見たくない」から、あえて「見よう」「見たくない」状況が広がるのではないか。それとともに、「見えない」こともはっきりと「見える」ようになると思う。

今回のシンポジウムに参加して「見えない」ことと「見ない」ことを考えさせられたが、これからもシンポジウムの発展に期待したい。